

ろくべん館だより Vol.40

『東北の語り部たち』

その人は、「83歳になります」と言った。ほんとうに小柄な、ポケットに入れたいくなるほどかわいいおばあちゃんだった。

わたしは6番めに生まれた末っ子だから、ムツという名前なのよ。40過ぎてからできた子だったもんで、母親はわたしが生まれると膝っこでプチッと潰して流しちまおうかと思っていたけど、ちょうど長男の嫁さまの産んだ子が死んでしまったもんで、わたしは生かしておこうということになったそうだよ。

わたしは背丈がちっちゃいもんだから、嫁の貰い手がなかなかなくて、やっとなこと9つ違いのおじいさんが貰ってくれたわけ。こんなにちっちゃいから、着物の布がそんなにいらぬから銭こが溜まるだろうと貰ってくれたけれど、結局体に合うような服がなくて、袖を切ったり丈を詰めたりして直さなきゃならなくて、なんにも得なことなどなかったって言われたよ、ハハハ。

わたしは70歳になるまで製材所で働いたのよ。それだもんで、おじいさんはおめえの好きなことやれって言うてくれた。わたしは山に登るんだよ。岳友会には行って、日本中あちこち行ってきた。大雪山から富士山から御嶽山にも登ったよ。おじいさんはその度に「行ってこい」って送り出してくれたのよ。

そのおじいさんは今年の8月に93歳で亡くなった。わたしは幸せだったよ。

と、これは宿での朝食時に会ったときの立ち話で聞かせてくれたものだ。こんな話を音楽的とも詩的とも思えるような美しい秋田弁で、軽妙に語ってくれた。

10月半ば、「日本で最も美しい村」連合に加盟する秋田県東成瀬村で、「昔っこの祭典」という全国から伝承の語り部の集まる催しが開かれた。地元の秋田をはじめ、東北からの参加者が一番多かった。遠くは宮崎、福岡からも加わり、全部で30話ほど、どっぴりと民話に浸かった一日を過ごした。

なんといっても驚かされたのは、東北各県の方言がそれぞれ持つ旋律の美しさと表現の豊かさだった。標準語で語られる物語とは、まるで違う表情を持つ。東成瀬村の人たちは、「子供の頃、雪に閉ざされた冬の間の楽しみといえば、なんといっても炉辺で聞く昔話だった」と口々に言った。

東成瀬村の村長も教育長も「言葉は文化です」と挨拶の中で言っていたが、土地の持つ歴史・風土・暮らしの中で育まれてきた言葉を誇りとし、大切に伝承している姿勢に頭が下がる。村では『さあ・シャベローゼ大会』というイベントが開かれ、各団体3分の寸劇の中に、できるだけ多くの方言を入れて演じ競い合う。「小学生の部」「中学生の部」「大人の部」に分かれ、優勝チームには『えがったで賞』が贈られる。こうして方言のすばらしさや大切さを再確認し、郷土愛や連帯感を深めているのだという。こういう土地柄、冒頭

のムツさんのちょっとした立ち話でも、自分を語る表現力の豊かさに驚かされるのも納得できる話である。語りというものが、子供の頃から身に馴染んでいる土地柄なのだを知った。ムツさんを含め東成瀬のおばあちゃんたち、山形新庄市、青森十和田市、岩手遠野市、福島は会津からの参加者の語りは特に印象的だった。

口承文化は文字に圧され、さらにはコンピューターに圧され、今や風前のともしびともいえるが、全国各地からいろいろな物語りが集まれば、まだまだ語り部文化は豊かに生きているように思える。怖いやまんばや鬼の登場する話、しみじみと道理を説くもの、夢の話、歴史をわかりやすく伝えるもの、欲を戒める話、人情にほろりとする話、どれも耳に馴染みやすい話であった。そして方言というものは、こうして昔話を語る時、実に耳にしっかりと心地よいものなのだ。

火を囲みながら、おじいさんやおばあさんの語る夜話に耳を傾けながらまどろんでゆく、そこは子供にとって家族のあたたかい団らんのある場であるとともに、未知の世界への窓口でもあったにちがいない。